

## 縄文海進時の貝化石産出

東町中学校 堀川治城

第四紀は、氷河の消長に伴って海水面の上昇沈降が起こっている。ことに縄文前期～中期の頃は今より温暖な気候で、海水面が上昇したため、日本の海岸線は多くの場所で現在よりずっと奥にあったとされている。このことは関東平野や大阪平野などで、「現在の海拔数メートル以下の土地は海面下にあった」ことがいろいろの事実からわかっている。有明海において、この時期の海面上昇は有明海研究グループ（1965）により5メートル以下とされている。当時の有明海の海岸線は熊本平野にも深く入りこんでおり、熊本平野の周辺に点在する縄文期貝塚と熊本市小島、川尻などの地下浅い所に貝殻を含む層の存在もこのことを物語っている。以上のことは、本誌No 63，田村（1980）により詳しく述べられている。

筆者は、国道3号線緑川橋架橋工事で地下三十数メートルまで掘り上げられた堆積物を観察したので、その中に含まれていた貝化石とその産状について、また工事業者の好意によりボーリング資料もみることができたので、

現場の地下の大まかな様子について報告する。

架橋工事に際して掘られたボーリングによる地下の地質は図4に示す。貝殻混じりの層は深さ10メートル付近からあらわれ、深さ18メートルまで続いている。それはシルトを主体としたもので、1cm以下の小型二枚貝や巻貝、ツノガイ、ウニの破片などの中に、当時は人間もとらなかったせいもあり、大形のハマグリ、アカガイ、カガミガイ、オキシジミ、ハイガイ、マガキ、イタボガキなどの二枚貝とツメタガイ、バイ、アカニシなどの巻貝が認められる。特に20cmを越すマガキの産出がめだつ。カニも数種産出する。深さ19メートル付近には60cm～130cmの灰白色を呈する火山灰の層が存在する。この酸性の火山灰層を挟んで、20～25メートルの間に多量の二枚貝化石を産出する。その中でも現場の状況と工事をした業者の証言から、深さ23～25メートルの間の粘土層中に、殻が厚く、長さも20cm以上の大きさのものを含むマガキ（*Crassostrea gigas*）を産する。この層中にはレキなどは見られず、1個体が合弁で産したり、



図-1 有明海と熊本平野

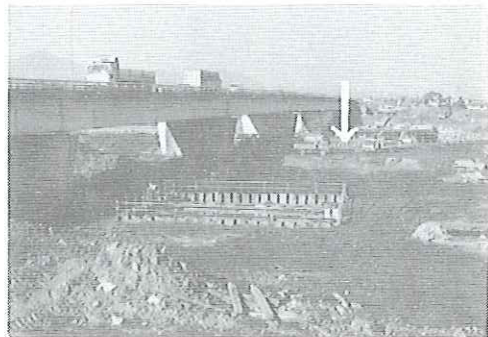


図-2 緑川橋工事現場（↓印の地点が図-4のボーリング地点）

塊状で産することもある。現在の有明海でも干潟表面のいたるところに点在する付着物に固着するマガキが見られるが、同じような環境であったのだろう。注意したいことは、マガキの殻の内側に付着生物が全く認められず、おそらく生没化石であると思われることである。火山灰層の上位に含まれる大形のハマグリやカガミガイなどの多くの殻内にフジツボ、イタボガキなどの付着生物がみられるのと対照的である。深さ31メートル以下は砂レキ層で、レキ種は現在の緑川川原でみられる砂岩、頁岩、チャート、カコウセンリョク岩などで、亜円レキないし円レキでこぶし大のものがほとんどである。尚、産出したマガキは熊大・田村先生の手により年代測定中である。また灰白色の火山灰は熊大・渡辺先生のもとで検討中である。

先に述べたように、縄文海進によって侵入してきた海は、泥・砂を堆積して沖積平野をつくっており、堆積物は地表下深部にある。熊本平野においては、ボーリングや橋脚部掘削屑などの地下調査により、貝殻を含む層の存在は知られていたものの、貝化石などを採取する機会は殆どなかった。熊本平野の地史を考える資料に役立てばと思い、簡単に縄文海進の事実を報告した。

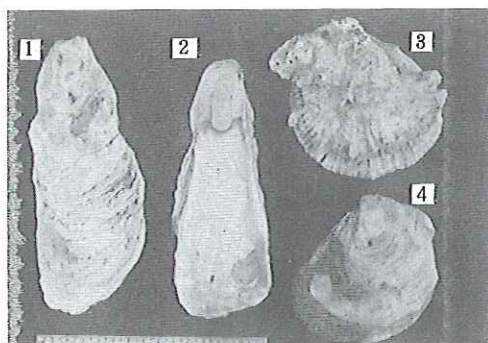


図-3 地表面下23~25m付近より産出したマガキ(1,2)と深さ15m付近より産出したイタボガキ(3,4)。ものさしの長さは15cm。



図-4 ボーリング資料

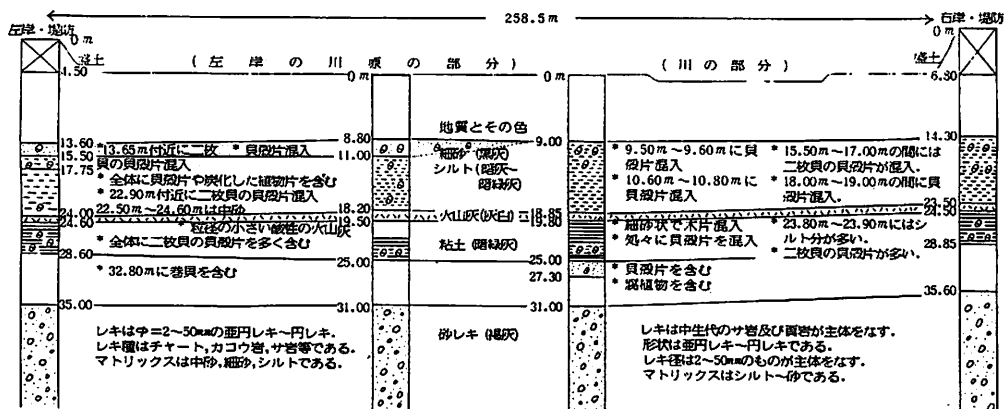


図-5 ボーリング資料 (貝殻層の記録を抜粋したもの)